

## 若き日のマルセル<sup>(1)</sup>

広瀬 京一郎

### 一

ガブリエル・マルセルは一八八九年十二月七日、パリに生まれた。

父アンリ・マルセルは、のちにスエーデン駐在フランス全権公使や国立美術館長などを歴任した、教養ゆたかな人物であった。母はひとの話や「かがやくような活気」に満ちたその手紙から察するところ、「みごとに人生に一致した女性であったらしい。夫は彼女のうちに、趣味や探究熱を心から一つにしてくれる無比の伴侶を認めていて、よく長い旅をともした。アランソンの教会の美しい正面の彫刻に見ほれていて、土地の人々からげんな視線を向けられたというのは、こうした旅行の思い出であったかも知れない。<sup>(2)</sup>一八九三年の春にも、母は下アルプス地方へ、夫の選挙運動に同行した。その時の疲れが原因であったのだろうか、その年の十一月、ガブリエルが満四歳になる直前に、オペラ・コミック座へ観劇に行ったとき、外へ出るなり急に悪寒をおぼえ、わずか二日床にたっただけで、その月の十五日に急死してしまった。

この母についてのガブリエルのほとんど唯一の思い出は、生家ジェネラル・フォワ通りのアバルトマンで、父の前

でピアノを弾いている姿である。目だたない片隅でガブリエル自身もピアノを弾いているようだったが、同時に母のピアノをきいていた。多分三歳くらいのことだったろう。<sup>(3)</sup>

母の死後、彼は母方の祖母と叔母の住むメソニエ通りのアバルトマンにひきとられた。その頃のことをマルセルは次のようにのべている。「祖母の家にいくなり、私はやさしくいたわられた。あるとき祖母と叔母が私のうちに助長した心理状態は、若き日のブルーストのそれになりに似ている。私を息子のように扱ってくれた、この選りぬきの二人の女性のやり方と、それに比べてずっと唐突で、いくらか高圧的な父のやり方とのコントラストは、実際ブルーストが書いている、あのコンプレーでの彼の父と母とのそれぞれの態度のコントラストそっくりだった」<sup>(4)</sup>。

叔母は詩的才能にはめぐまれていたが、音楽だけはどうしても理解できないひとであった。しかしピアノを弾くことはでき、ベートーヴェンやモツアルトのソナタをはじめ弾いてきかせてくれたのは彼女であった。総じてこのメソニエ通りの家では、音楽はそれほど愛好されていなかったが、幼いガブリエルの心はずでに、音楽に深くひたされていたようである。こんな思い出をマルセルは語っている。

ときどき父のアバルトマンへつれていかれるのは大きなたのしみだったが、そんなある日、彼は父に、楽譜をもつて帰って自分のそばにおいてもいいかと訊ねた。それはモツアルトのドン・ジョヴァンニだった。<sup>(5)</sup> もちろん読めはしなかつたけれども、彼にはそれがぜひとも必要な守り神のような存在だったのである。

母の死の三年後、父はこの叔母マルグリットと再婚した。父と新しい母、それに母方の祖母と幼いガブリエルの四人の家族は、「モンソー公園に近い、平凡なせまい通りに面した陰うつな大きなアバルトマン」で暮らすことになった。幼年時代を通じてひきこもりがちだったガブリエルは、文字通り大人たちにかこまれて大きくなった。「私の生活はある点で、大人たちの生活にしっかりまじりあっていた。みんな私のいる前でおしゃべりしたし、私に教えるこ

とのできるどんな機会も見のがさなかった。けれども、これらの大人たちは、いわば教会のドームのように、私の上に高くそそりたつていた<sup>(6)</sup>。

父は幼いガブリエルにとっては、こわい、ある意味では関わりのない存在であった。彼は、おそらく不幸な少年時代を送ったことから、「まれにみる自立心の強い人間」になったが、同時に「お世辞の言えない、あたたか味のない人間」になってしまった。そうした強い一面をガブリエルは尊敬していたが、父はそのために多くの敵もつくつていたにちがいない。「彼は国立美術館の館長をしていた間中、たえず彼に向けられる政治的な売りこみを断乎としてはねつけた。その代わり、気の毒な芸術家たちで、才能があり、援助をしてやるねうちがあるとされる人々には、いつも援助を惜しまなかった。これは一種の愛他心のあらわれであろう。しかし、才能がないと思つた人間に対しては、きわめて薄情であつた<sup>(7)</sup>」。美術ばかりでなく、音楽や演劇に深く愛好していた。美しいテノールの声の持主で、ガブリエルのピアノ伴奏で歌うこともよくあつた。とくにシューマンを愛して、自分が監修していた叢書の一冊として、シューマンについて書こうとしたこともあつたほどである。しかし、彼にとって芸術は一個の避難所、明らかに根本的に不条理と思われる人生からの避難所であつたのであろう。

彼はカトリックの中で育てられた人ではあつたが、とうに教会から離れていた。テーヌやスペンサー、ルナンの影響をうけた、十九世紀末の多くの不可知論者の立場を、彼もとつていた。芸術がカトリシズムの恩恵をうけていることは卒直に認め、感謝もしていたが、カトリック思想そのものは時代おくれで、ばかげた迷信に毒されたものだと考えていた。彼にしたがえば、自由な精神はそうした子どもっぽい信仰からは離れざるを得ないのである。

それにまた、おそらく、彼にはアナトール・フランス風の異教思想があり、そのためにカトリックの禁欲精神を、人間の本性を圧迫し歪曲させるものとして、それに反抗したのであろう。彼にはありきたりのエピキュリアンのよう

などところもないではなかった。しかしその反面、厳格な規律のある生活を送り、国家への義務を重んじることで人後に落ちなかった。

第二の母マルグリットはしっかりした気性の女性で、ガブリエルの生活のくまぐまにまで光をあてる権利があるという確固たる自信をもっていた。ユダヤ人の出であったが、その生家はいかなる宗派の信仰をもっていないなかったらしい。彼女自身はプロテスタントに改宗したが、彼女が頼っていた牧師の撰び方から見て、その信仰がプロテスタントのうちの最も自由主義的で、教義というようなものをもたず、理性を犠牲にすることが最も少ないような種類のものではあったことが分かる。

さらに彼女は、アルフレド・ヴィニーからアッケルマン夫人にいたる、十九世紀のベシミスティックな詩人たちを愛読しており、人生は無意味だという抜きがたい意識をもっていた。彼女から見れば自然に信頼することは不可能だった。なぜなら自然は根底において悪いものではないけれども、少くとも善悪の対立には無関係だからである。この世は本質的に住みにくいものであり、われわれは理解しがたい運命のたわむれによって、ここに生み出されてきたのである。そのようなわれわれにとって、生きる道はただ一つしかない。自己自身を忘れて、苦しんでいる人々の人生を楽にするように努力すること、さらに自分自身に対しては極度にきびしい道徳律を課することである。一步その外へ出れば一切が放縱にほかならない。

母方の祖母はまごころのある、すばらしく心の広い人であったが、この二人の女性は幼いガブリエルを掌中の珠のように大切にし、一挙手一投足にいたるまで監視の目を怠らなかつた。そして、たとえば病気だとか、学校の成績がよかった、わるかったとか、そういうことをいちいち重大視した。ベッドにはいるときは、きまって皆で、具合が悪くないか、とか、そのほか当然彼から期待できることやできないことまで、いろいろ問いつたのであった。このよう

な過保護の中で育ったガブリエルは、当然のことながら、ひどい癪持ちで、極度の緊張になやみ、時としてひきつけの状態にまで達することもあった。それはひとりっ子で、自分が家族から期待されすぎていることを強烈に自覚することから生じた苦しみであった。

家庭の雰囲気は道徳的に非常に潔癖で、衛生上の注意なども大へんやかましかった。ガブリエルはいわばこうした衛生的・道徳的な警戒網の中に閉じこめられた、ひよわな小鳥のような存在だった。彼はのちに、こうした家庭の雰囲気が、彼自身の最初の哲学思想の風土が抽象的で、彼がはじめから経験論に対して敵対的というか、ほとんど軽蔑的な態度を自発的にとることになったことと関連があるのではなからうか、と言っている。そのような態度は結局、幼いころに教えこまれた、細菌や道徳的不潔さに対する嫌悪が、思考の面に移しかえられたものではなかったか、というのである。

第二の母マルグリットがつくりあげた、こうした温室的な環境に対して、父はあまり賛成していなかったらしい。そのことを幼いガブリエルはかなり敏感に感じており、その父の不賛成に傷つけられてもいた。それほど彼の継母に対する愛情のきずなは強かったのである。もっとも、その圧迫からのがれたいという欲求は、無意識のうちに絶えずはたらいだいたにちがいない。そこに精神分析学者がいう「検閲」に似たものがあつたことを、彼も認めている。時には、むりに抑えつけようとする母に対して、はげしく反抗したこともあつた。<sup>(9)</sup>この愛情と反撥とから、さらに亡き母に対する思慕の思いから、養母に対する「深い負目の感情」は生じたのであろう。<sup>(10)</sup>

父と母との間にはかならずしもしくりいっているとはいえないかった。解きたい考え方の食いちがいや趣味の不一致を別にしても、二人の間には亡き妻、亡き姉の面影がただよっていたのではあるまいか。家族の誰にとっても親しいはずのこの女性について、話されることはめつたになかった。しかし誰ひとり彼女のことを忘れることのできた者

はいなかった。幼いガブリエルは気づかなかつたが、とりつきにくい父の外見の下にも、亡妻の死によって深く傷ついた魂がかくされていた。

彼自身においても、強い継母の性格が次第に亡き母の面影を消してはいったが、母はつねに彼とともにあり、ふしぎな現存を保ちつつけていた。それはふしぎな二元性であった。一方は、もはやこの世にない女性、誰もが胸に秘めながら語らぬひと、彼自身も一種の畏敬から、そのひとつについて質問することをひかえていた女性。他方は、しっかりした気性で、彼の生活のくまぐままで光をあてる権利があるという自信にみちた女性。この目に見えない者と目に見える者との不均衡、あるいはむしろ、秘かな対極性ともいうべきものが、彼の思想のみか、存在自体の上にも、何らかの神秘的な影響を及ぼしたことは確実である。

七、八歳のころ、ある日モンソー公園を散歩していたときのこと、人間は死後も存在しつづけるのか、それとも消滅してしまうのか、というガブリエルの問いに対して、義母がはっきりと答えることのできないのを見てとって、幼い彼は「よし、そのうちに僕がはっきりさせてやろう」と叫んだとい<sup>(12)</sup>う。これが彼に哲学的使命感が生まれた最初の時であった。のちに彼が不死性の問題を扱うとき、自己の不死ではなく、愛する者の不死を問題にしていることを考えあわすならば、この幼い時の問題意識が、亡き母の思い出につながるものであったにちがいないと想像されよう。さらに、それにつづく学校時代についての次のような述懐も、同じ意味で理解することができるのではないだろうか。「学校生活のあいだ、絶えずつきまとわれていた不安が、過ぎ去って帰らぬものについての感情、そして死の感情と関係していたことは明らかである」。

教会のドームのように頭の上にそりたつ大人たちばかりにかこまれていた幼いガブリエルにとって、いちばん欠けていたのは、心やすく話したり遊んだりできる兄弟姉妹であった。近くのモンソー公園で遊ぶ仲間が四人ほどいる

にはいたが、やはり兄弟のかわりにはならなかった。<sup>(13)</sup>いつか、ある人のいいドイツ婦人につれられて、モンソーの高台かエトワール広場へ散歩にいき、ひどく退屈した記憶がある。そうした時にはいつも、兄か姉と一しょに散歩しているのだ、と空想せずにはいられなかった。<sup>(14)</sup>このような経験がおそらく、彼のうちに最初にあらわれた劇作の稚い芽生えであった。対話という形式にはごく早い時期から、不思議な魅力を感じていたのである。

演劇愛好家の父がよく観劇につれていってくれたことが、この傾向に拍車をかけた。五歳のときシャトレで話劇を見たこと、コメディ・フランセーズでモリエールの「氣で病む男」や「スカパンの悪だくみ」を見たことを、マルセルは思い出している。「もう少し大きくなってからは、『シラノ・ド・ベルジュラック』に夢中になった。第五幕でシラノがロクサーヌに向かって、

いやいや、いとしい人よ、私はそなたを愛してなぞいなかった！

という段になると、とめどなく涙が出たものだった。<sup>(15)</sup>」

最初に戯曲を書いたのは七歳のとき。この「ジュリウス」という作品は、その後祖母の誕生日のために書き改めた。それにつづいてまたいくつかのロマン主義的な作品を書いた。<sup>(16)</sup>

こうして、彼の趣味は、小説その他の叙述形式に向かわず、むしろ主体をたがいに対質させて、その背後に自分をかくす戯曲という芸術の方へ、自然に傾いていった。彼がごく幼い頃から一種の陶醉を感じたのは、彼自身とはっきり区別されるさまざまな人物を想像するばかりでなく、それらの人物の代弁者になれるくらい、彼らに同化してしまふことであつたのである。

家庭生活の経験も、彼の演劇に対する偏愛を助長したにちがいない。彼は幼い頃から、自分の家庭をつくっているひとりひとりが、物の考え方と氣質を異にしていることに気づいていた。そしてそこから、外見的にはきわめて簡單

な人間関係にも、往々にして解きほぐし得ないもの *insolubilia* がふくまれている」とを、早熟にも意識せざるを得なかつたのである。

とくに一つの事件が、この意識を彼に強く刻みつけた。それはマルセルの叔父の一人(母の弟)の離婚さわぎであった。この二人のひとり娘、つまり彼の従妹とは仲よしだっただけに、この事件は大きいショックだった。そればかりではない。祖母は当然息子の肩を持った。が、本当は彼の方が悪かったのである。父は反対に、叔父に何の同情も持っていなかつた。そして、叔母とは二人とも音楽が趣味だという点で親しくしていたし、離婚後も交際をつづけた。このことは祖母にとっては、かなり苦痛だったようである。

彼はのちに、十八歳のとき、こうした家庭環境を題材に「二つの過去」*Les deux Passés* という戯曲を書くにいたるが、この一しょに暮すべき運命を荷った人たちの、解きほぐせない対立・相剋の関係についての悲痛な意識は、その後も、むしろ彼の生涯を通じて、その思想形成に培養体として作用しつづけたのであった。

「世の中には、ある平面では、どうしても相容れないさまざまな見方があり、公正と真実とを心がける人は、それらをかかわるがわる採用するほかはないということ、それらさまざまの見方を和解させるような、統一的な公式を見出す望みはまったくないということ、このことにもまして、私に明瞭にさとらせることはなかつた。そして、そこから直ちに、面倒な理くつぬぎで、次のようなことを認めるようになった。つまり、判断というものには何か根本的な弱さがあるということ、したがって、調和を予感させるような、ある意味では調和を回復させているような確実なもの、議論を越えたところに、知覚するとまではいわないにしても、肯定する必要があるということ、その際、推論的な理性は満足を与えられなくても止むをえない、それを要求することがおそらく不当なのだということ、である。この「ある確実なもの」、「超理性的な統一を、指定し、推進することこそ、私の目から見ると、演劇の本質的な



はたらきであるが、こうした統一のまぎれもない一つの典型を私に与えてくれたのは、明らかに音楽であった。前にも述べたように、<sup>(9)</sup>彼においては、まず音楽が示す超理性的統一が、演劇によって追求され、最後に哲学的思考がそれを肯定するのである。

そして、音楽が演劇にその追求すべき統一の典型を示したように、演劇はまた哲学的思考に対して、その統一を実現するしかたの典型を示したのである。「今日になってはつきり認められることは、主体を主体としてのかぎりにおいて、すなわち主体としてのその現実性において設定することによって成り立つ演劇的思考法が、そののち純粹に哲学的な分野で、客観性を超越する認識に関して、私が決して直接的な主観性の圏内に閉じこめられることなしに書き得た一切のことを、あらかじめ例示し、事実をもって証明していたということである」。

二

一八九八年から九九九年にかけて、当時九歳であったガブリエルは、スエーデン駐在のフランス全権公使になった父につれられて、約一年間ストックホルムに滞在した。このスエーデン時代の体験は、その後長い間、彼に深い影響をのこしたらしい。

背後にそれぞれ異った未知の世界を持っているように思われる、外国の外交団の子女たちとの交わりは、何か誇らしい満足感を与えた。そこには一種の俗物主義の芽生えもなかったとはいえないが、もっと値うちのあるもの、いつてみれば知識上の世界市民主義とでもよぶべきものがあつた。

母方からユダヤ人の血をうけていたこともあつたのであろう、もともと、民族主義や盲目的な愛国主義は、彼の肌にあわなかつた。町で軍隊を先頭にたてた軍隊の行進に出あうと、いいようのない嫌悪感にかられたものであつ

た。音楽に対しては激しい情熱を抱いている彼ではあったが、軍楽隊と群衆、民衆煽動的な性格を示す一切のものに対しては、恐怖をおぼえずにはいられなかった。<sup>(20)</sup>後年、彼はナチズムをはじめとする、あらゆるファナチズムに対して、執拗な分析と批判の手をゆるめなかったが、その素地はこの時代にすでにあらわれていたといっている。

カブリエルは、このようにして、北欧の風土にすっかりなじんでいた。それはすでに、彼がのちにいうような「わが家」*chez soi*であった。だからある日突然、フランスへ帰る、と父から聞かされたときは、ほんとうに呆然としてしまった。一年ぶりに帰ってきたパリには、彼をひきつけてくれるようなものは何もなかった。退屈きわまりない日常生活、たえがたいあの並木道の散歩。そして早くも迫ってきた高等<sup>リ</sup>中学校<sup>セ</sup>生活の影が、彼を不安と恐怖でおびやかした。そうした彼には、スエーデン時代の自由で、個性的な、未知のものに開かれていた生活が、かぎりなくつかしいものと思えたらしい。<sup>(21)</sup>

ちょうどこのころ、フランス全土はドレーフェス事件で沸いていた。エミール・ゾラが有名な「われ弾劾<sup>ジャック・マテ</sup>す」を發表したのは一八九八年の一月、長い激しい闘いも空しく、レンヌの軍事法廷で、あわれなユダヤ人ドレーフェス大尉が再び有罪の判決をうけたのは一八九九年の九月であった。この間、人権と国家理由<sup>リソソ</sup>、人道主義と反ユダヤ愛国主義が、すべてのフランス人をドレーフェス派と反ドレーフェス派に分裂させ、その分裂の溝は各々の家庭の内にも深く忍びこんでいった。マルセル家もその例外ではなかったらしい。とくに、義母の友人で、ドレーフェス大尉の従妹にあたる婦人に、ピアノをならっていたカブリエルは、幼いながらこの問題に激しい興味を覚え、大人たちの会話に耳を傾けた。こうした問題で彼に最も強い影響を与えたのは、合理的できびしい道德意識の持主だった、ユダヤ民族出身の義母自身であった。おそらく彼女はかなり激していたし、終始国家に忠誠であつたらしい夫とは意見が合わなかったであろう。カブリエルはこのときも、叔父の離婚さわぎの場合と同様に、大人たちの皆が皆、自分の観点に因

わかれてあい争うのを見たのである。レンヌの軍事法廷の判決をピュルヘンストックできいたとき、彼は大きな衝撃をうけた。「この事件は私にはっきりした態度をとらせることになった。私は生涯ドレーフユス主義者として行動した、と私は考えている。」とマルセルはのちに述懐する。<sup>(22)</sup>正義の人が大衆の熱狂の犠牲になるといふ、いたましい事態に対する憤激は、また、同じくこのころ父に読んでもらったイブセンの戯曲「民衆の敵」によって、深い芸術的な感動にまで高められたであろう。<sup>(23)</sup>

スエーデン滞在中に、彼の心のうちに育っていった、もう一つの、もっとはっきりした感情は、暗い湖沼、切りたつた岩、亭々たる樅や白樺の木などから成る、北欧特有の風景に対する深い愛着であった。それはそのちも長い間、彼の心を郷愁で満たしたものであった。というのも、こうした風景が、幼い彼の心のうちにはぐくまれつつあった、孤独な、苦悩にみちた世界を、最もよく象徴するものだったからであろう。ガブリエルはようやく内面の世界に目ざめはじめたのであろうか。このさびしいメランコリックな風景は、このころはじめて目を開かれた内面的音楽、グreekやシューマンと、おのずから一種のつながりをつくって、彼の心の中に定着していった。<sup>(24)</sup>のちに彼は、北欧の詩人哲学者キェルケゴールの歩んだ道を、それと知らずに独力で切り開いていくことになるが、そこに、こうして自然に培われた「一種の北歐的な風土の思想と感受性」ともいふべきものを見ることはできないだろうか。しかし彼の父は、地中海的な南欧気質の持主で、そのような風景に死ぬほど退屈したらしい。この点でも、父と彼との間には、感情の上での疎隔が早くから生まれていたと思われる。<sup>(25)</sup>

### 三

スエーデンから帰ってちょうど一年半経ったころ、一九〇〇年、カルノー高等中学校へ入学した。高等中学校の生

活は、あやうく彼をおし殺しかねまじいもののように感じられた。年がら年中の席次争いは我慢がならなかった。家庭がまた、その学業成績に過度の注意をはらうので、まったくのがれようがなかった。試験の前の晩に「こんな試験を受けるよりは、盲腸の手術でもした方がよっぽどましだ」と呟いたこともある、とは、すでに老境に達した哲学者の回想としてはいかにもほほえましいが、十かそこらの少年にとっては胸のあつくなる憤りであったにちがいない。とはいうものの、成績は大体においてよかったし、第五学年(日本の中学一年)から哲学学年(日本の高校三年)まで、優等賞を欠かすことはなかった。そのかわり、不断の緊張の結果とうとうひどく健康をそこねてしまうことになった。彼がとくに反感を感じたのは、この「砂漠のような世界」に結びついた価値の体系であった。非のうちどころのない、いわゆる優等生に対しては、どうにもやり切れない気持を持たずにはいられなかったし、そうした生徒と比較されたりすることは、彼を深く傷つけた。「この高等中学校<sup>1</sup>それ自身が結局、抽象精神の唾うべき本尊であった。実際生徒と教師、生徒同志の関係、そしてとりわけ、学校が生徒に教えこもうとしていた諸観念ほど、抽象的なものがあるだろうか。こうしたものうちに、われわれの心を揺り動かし、われわれの存在の内面的な要求に応えるようなものは、ほとんど何もなかった」。それどころではない、文学をあれほど愛するマルセルでありながら、彼自身、「高等中学校で教わった作家たちで、その後長く嫌いにならなかつた作家はほとんどいかなかった」と告白するほど、その影響はむしろ破壊的でさえあったのである。彼は晩年に自分の生涯の仕事をふりかえりながら、それを「抽象化の精神に対する休みなき執拗なたたかい」と呼んでいるが、ここに引用した文章に先立つ箇所でも、「今になってみると、のちに抽象化の精神が私にふきこんだ、いや増す恐怖の念の根源には、この高等中学校に対する嫌悪があったのではなからうかと、疑われてくる」と述懐している。

それだけではない、この高等中学校の抽象的で非人間的な体制に対する抗議は、もう一つの、それよりずっと不明

確ながら、同様に根の深い抗議と、切りはなして考えることはできない。それは第二の母たちのつくった家庭に対するものであった。彼の少年時代を絶えずやさしい気づかいで包みはぐくんでくれたこの人々が、彼に生きることを強制していた世界は、「さまざまな倫理的命令の畝がつけられていながら、うち克ちがたい絶望によって荒廃させられた世界」であり、「道徳的意識と死とによる、全く異常な共同支配に委ねられた世界」であったのである。それは幼いガブリエルを不安な過度の緊張に追いこんでいったのだが、周囲の善意の人たちはそのことにまったく気づいていなかった。

第二の母は極度にきびしい道徳律を自分に課し、おそらく幼いガブリエルにも強要した。父も厳格な規律のある生活を重んじる気むずかしい人物であったが、反面エビキュリアンなところもないではない、芸術愛好家であった。父の審美的な世界観と母の倫理的な世界観との間の「時にはほとんど耐えがたくなるような対比」を、ガブリエルは認できないままに苦しんでいた。その対比はいずれ、「もはや純粹に美的な、あるいは倫理的な次元ではなく、宗教という第三の次元へ導く、不可解ながら抗いえない衝動の起因」となった<sup>(27)</sup>かも知れないが、この時代にはまだそれは全然自覚されていなかった。というよりむしろ、同じ父母によって、厚い壁の彼方に蔽いかくされていた。というのも、この二人は、宗教に関しては、ベシミスティックな不可知論の立場をとることで一致していたからである。

ガブリエルもこの両親の影響の下で、宗教については全く無関心だったといっている。「当時の私は、宗派的な宗教教育を受けている同級生を、決して羨んだりしなかった。私のつきあっていた友だちは、やはり無信仰な家庭の子どもたちだった。私が通学生だった高等中学校の教室では、宗教学校から来た生徒と机を並べていたが、彼らがどんな靈的な糧を得てきているかなどということは、一度も考えたことがなかった。もっとはっきり言えば、靈的な糧などというものはもともとありはしない、と考える傾向があった。そのころ私が漠然と認めていたことを言い表わせ

ば、次のようになろう。現代においては、聡明な人間でもプロテスタントにならばなることができる。プロテスタントチズムは思想の自由をふくんでいるから。しかしカトリックになっていようと思うには、かずかずの愚昧や徹底した偽善を犯さないわけにはいかない。この考え方は、両親、とくに父アンリの考えの敷し写しであったといっているだろう。

そのことをもっと明瞭に示しているのは、十歳ごろ父につれられてイタリアに旅行し、ヴェネツィアで二十ほどの教会を訪ねたときに感じた、「子どもっぽい誇り」の思い出である。「それらの教会は、私にとって美術館でしかなかった。私はそこで挙げられている、時代錯誤であるばかりか、不可解千万な典礼に対して、何の関心もはらわなかったものだ」。しかし、マルセルはこの回想を次のような言葉で結んでいる。「何よりも不思議なことは、それ自体として、またその超越性とよばれるものにおいて考えられる宗教は、あちこちで行なわれている儀式にこびりついた歴史の汚れとは本質的に関係のないことだ、と思われたことである。」<sup>(28)</sup>ここに、父の審美的な不可知論とともに、母の合理主義的なプロテスタント的宗教観を見ることはできないだろうか。

しかしガブリエルは、彼自身もおちいっていた、周囲のこのような宗教的不可知論がもし出す、「不安定で乾燥しきった雰囲気」を、堪えがたく「息苦しい」ものに感じていたのである。イタリアやスエーデンの自然に「宗教的な」感動をよびまされたことがあったのも、そうした心境が下地をなしていたのであろう。十五歳のときに書いた戯曲「山上の光」は、すでにこのころ彼のうちに宗教に対する関心が芽生えていたことを物語っている。この未刊の戯曲について、マルセルは次のように語っている。「いくらか意味があると思われる最初の戯曲は十五歳の時に書いたもので、『山上の光』という題だった。家の人々はこれを読んで、いくらか見所があると思ったのであろう、知り合いの女の人を通して、詩人のフェルナン・グレーに読んでもらった。詩人は親切な手紙をくれて激励してくれ

た。この戯曲は北歐を場面にとり、主人公は信仰を失いかけている牧師で、彼は自分の妻の女友達に恋をしている、といった筋である。もう久しく読みかえしたことがないが、もし読みなおしたら、きつといらいらした気持になるだろうと思う。しかこの戯曲は、すでに宗教への関心が示されているという点だけでも、いくらか意義があることは疑いをいれない。それどころか、後年の『神の人』の、きわめてはるかな、色のうすい下書きであったと言っても言いすぎではないであろう<sup>(29)</sup>。

このころの生活のうちで、のちの哲学的思索をひそかに準備したものに、休暇中の旅行の体験がある。毎年休みごとに山へ出かけていったが、それは彼にとつて、さながら砂漠の中のオアシスの思いであった。たとえばバヴァリアのホーエンシュヴァンガウなど、いつもちがった、珍しい場所へ行った。幼いガブリエルの最大の喜びは、発見し探険する喜び、ふだん見なれたものの彼方を想像する喜び、旅をすればさらに遙かな旅を企てる喜びであった。彼はよく、いくつかの地名について、（ブルーストのように）いろいろと夢想することをたのしんだ。彼にとつては近づきたいもの、身近かでないものこそが尊く、誰にでも近づけるもの、誰でも見られるもの、ロワールの城やモン・サン・ミシエルのような名所は軽蔑にしか値しなかった。こうした名所は、日曜日毎の見物人の判で押したような感嘆の形容詞の厚い層でよこれ、変質しているように思われた。彼は踏みあらされていけないもの、汚されていない遙かなものに向かつて、陶酔的なあこがれを抱いていたのである。旅はこの未知な遙かな場所を、親しい「我が家」chez *soi* に変える努力であった。果しない未知の世界の中で、この「我が家」の部分を出来るだけ拡大していくこと、そして、抽象的に考えるもの、漠然と想像するもの、噂で聞き知ったもの、要するに自ら体験しなかったものの範囲を、無限に小さくしていくことを、彼はのぞんだのである。彼は晩年にいたるまで旅を愛して、その足跡は世界各地に及んだ。<sup>(30)</sup> 幼い日の夢を、彼は今も抱きつづけているのであろうか。

それはともあれ、幼い日のこの、未知の土地を「我が家」にする旅の体験が、どのようにのちの哲学的思索を準備したのか。あるいはそうした思想によって、どのような思想にまで「現像」<sup>(3)</sup>されていったのか。

美術館や教会を見物するとき、人々はふつう、呆気にとられたように、手にした案内書に記された事項を確かめ、チェックしていく。しかしこのようなしかたは、ガブリエル自身が未知のものに対して投げかける熱烈なよびかけとも、また、彼が自分の訪れる地方と結びたいと願っている、あの「我が家」という言葉で表現される親密な関係とも、全く異質のものである。この相異を理解するまでには長い年月がかかったが、やがて「存在と所有」 *Être et avoir* などで、この区別を基礎づけ、その意味を明らかにするために、さまざまなカテゴリーを規定しようとする試みがなされることになる。「私がこうしたカテゴリーを規定する必要を感じたのは、最も直接的な経験自体がみずから具現し、みずからを知覚しようとして、それらを要求したからに他ならない」。ここで「さまざまなカテゴリー」と呼ばれているのは、おそらく、「もつ」 *avoir* と「ある」 *être* 「問題」 *probleme* と「深秘」 *mystère* などを指しているであろう。それらはいずれも、対象として検証することのできるものと、検証することができず *inverifiable*、ただ主体的に参与しようものとの区別に関わるものである。

幼いガブリエルが熱烈にのぞんだのは、何も案内書に記載された教会建築の細部などを確認し、検証する *vérifier* ことではなかった。未知の土地を「我が家」にすること、自分をその土地の風土に馴らして、それをいわば内面化すること、そこに根づいて、新たな故郷 *un nouveau foyer* それもほんとうに自分の故郷といえるものを、そこに見出すことが問題であったのである。私を一定の土地および家屋に結びつける、この「我が家」 *chez soi* という関係は登記原簿などで検証できる所有関係ではない。実際、買ったばかりの家についても、「我が家にいる」 *être chez moi* 気がしないということは大いにありうることである。私はそこに自分が無縁であり、そこにいるというよりむしろ、置か



れているという感情をもつのである。この「我が家」chez soi という検証不可能な深秘については、マルセルはのちに見事な現象学的分析を与えている。<sup>(33)</sup>このように、彼の哲学の主要テーマは、最初「全く子どもっぽい感情」*pre et simple enfantillage*として胚胎していたのである。

旅行のほかに、あの「砂漠のような世界」の中で彼の心を慰めてくれたものに、演劇とならんで音楽があった。彼の音楽熱は一時期、十四、五歳ころには、作曲家として立とうと考えるまでに昂揚した。音楽愛好家だった父親もそれを望んでいたらしいが、慎重な音楽教師の反対でとりやめになった。マルセルは今日もなお、その決定を残念に思う気持を抱いているように思われる。

十六、七歳ごろ、バッハの「ヨハネ受難曲」、「マタイ受難曲」、それに多くのカンタータを特別の感動をもって聴いた。それは彼を最も深く宗教的なものへと誘ったものであったらしい。「私を回心の道へ導いたのは、バスカルの『パンセ』もさることながら、おそらくそれ以上に、これらバッハの作品であったといっても、いささかも誇張ではないと思っ<sup>(34)</sup>ている」。

注

- 1 以下の叙述及び引用文はとくに断らないかぎり、マルセル自身が書いた *Regard en arriere* (Existentialisme chrétien : Gabriel Marcel, présenté par E. Gilson, 1947; p. 291~p. 319) に拠った。邦訳「過去」方をかえりみて「安井源治訳、雑誌「運想」二九三号所収。
- 2 *Declin de la sagesse*, p. 50
- 3 *Aperçus sur la musique dans ma vie et dans mon oeuvre* 邦訳「音楽と私」安井源治訳、マルセル著作集八「人間の尊厳」二二七頁。

- 4 「私はなぜ演劇を書くか」安井源治訳、「神の死と人間」二二二頁。
  - 5 「音楽と私」二二八頁。
  - 6 同右二一九頁。
  - 7 「私はなぜ演劇を書くか」二二四～二二五頁。
  - 8 「音楽と私」二二七頁、二二〇頁。
  - 9 「私はなぜ演劇を書くか」二二四頁。
  - 10 「音楽と私」二二九頁。
  - 11 マルグリットはアンリとの結婚後「それまでは彼女に閉ざされていた音楽の世界にはいろいろと大変な努力」をした。（「音楽と私」二二八頁）
  - 12 *La responsabilité du philosophe dans le monde actuel (Pour une sagesse tragique, 1968) p. 40f.* 邦訳「現代における哲学者の責任」山本信訳（マルセル著作集別巻「技術時代における聖なるもの」七〇頁。及び *La dignité humaine et ses assises existentielles, p. 43* 邦訳「人間の尊厳」三雲夏生訳（マルセル著作集八）六八頁。
  - 13 「音楽と私」二二九頁。
  - 14 「私はなぜ演劇を書くか」二二二頁。
  - 15 同右二二二～二二三頁。
  - 16 同右二一九頁。なお、トロワフォンテームによれば、この頃の劇作の手稿がいくつが残されている。制作年代の明らかなものだけを挙げておく。
    - Julius (déc. 1897) 八歳
    - Camuse (1898) 九歳
    - La Duchesse de Modène (1902) 十三歳
    - Le Dilemme (1906) 十七歳
    - Les deux Passés (1907) 十八歳
- なお *La Lumière sur la montagne* 「山上の光」は、ここでは制作年代が不明になっているが、マルセル自身の回想（「私

- はなぜ演劇を書くか」二一九頁）によると、一九〇四年、十五歳の作である。（Troisfontaines : De l'existence à l'étre, tome 2, p. 424）
- 17 「私は小説を書きたいという気持がまるで起こらなかった。もっとも実を言うと、「夜への祈り」Invocation à la nuitという題で小説を書きかけたことがあり、百ページほど書いたであろうか。「新フランス評論」（N・R・F）に毎月執筆していたころなので、（マルセルがN・R・Fに執筆しているのは一九一九年及び二三年以降である）つい『N・R・F調』になってしまい、それが自分でも気に入らなかった。これは単に、非常な優越感を持つ文壇が私をおびえさせたことに原因するかも知れない。そのほか、小説という形式をとると、つい自分というものをむき出しにせずにはいられないことに気がついた。自分についてばかりでなく、自分の知人たちについても、細かい事情を書かねばならないようになった。ところが、私の考えでは、作家はどこまでも慎しみを守らねばならないのであり、これと両立しないのである」（「私はなぜ演劇を書くか」二二二頁）。なお、この未完の小説の題名については、トロワフォンテーヌにしたがって訂正しておいた。
- 18 「私はなぜ演劇を書くか」二一九～二二〇頁。cf. Entretiens Paul Ricoeur Gabriel Marcel, p. 56.
- 19 拙論「ガブリエル、マルセル研究序説」（聖心女子大学論叢第三十一、三十二集合併号）一七五頁参照。
- 20 「私はなぜ演劇を書くか」二一六～二二七頁。
- 21 同右
- 22 Entretiens Paul Ricoeur Gabriel Marcel, p. 56; 96 f.
- 23 「私はなぜ演劇を書くか」二二七頁。
- 24 「音楽と私」二二〇頁。
- 25 「私はなぜ演劇を書くか」二二七頁
- 26 同右
- 27 La dignité humaine, p. 42. 邦訳、前掲書六七頁。
- 28 同右
- 29 「私はなぜ演劇を書くか」二一九頁。註18参照。
- 30 マルセルが訪みた外国旅行のリスマーは M. M. Davy : Un philosophe itinérant, Gabriel Marcel, p. 337～339 参照。そ

れによると、ヨーロッパ諸国を除いて、一九五一年には北阿南米諸国、五六年にカナダ、五七年に日本を訪れている。ただしこのリストは一九五九年までで、一九六一年のアメリカ訪問や、一九六五年の二回目の日本訪問は挙げられていない。

31 拙論「ガブリエル、マルセル研究序説」一六八頁参照。

32 マルセル哲学に特有のこの *mystère* という言葉は、それ自体何ら宗教的な意味をもつものではない。その意味で、従来の訳語「神秘」「秘義」などを改め、「深秘」としてみた。この訳語は畏友今道友信氏から拝借したものである。

33 *Du refus à l'invocation*, p. 41 f; 120 ff.

34 「音楽と私」二一九頁～二二二頁。